

日本手話を母語とする乳幼児に対する 津守・稲毛式乳幼児精神発達診断の実施に関する提案

手話言語を獲得しつつある聴覚障害児の心理発達を評価するために

○物井明子

中尾恵弥子

河崎佳子

（特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構）

（神戸大学大学院）

KEY WORDS: 聴覚障害児 津守・稲毛式乳幼児精神発達診断 日本手話

（目的）

2017 年 6 月より、大阪府乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」が開始され、聴覚障害のある未就学児とその家族を主な対象とし、親子間の愛着形成と子どもの手話言語獲得支援を目的に、日本手話のあふれる早期支援の場（日本財団助成事業）を月 2 回ペースで提供してきた（河崎・物井・久保沢 2018）。また 2018 年 4 月には、0～3 歳の未就園児と保護者を対象に「BABY こめっこ」を開始した（週 2 回）。そして、2020 年 6 月より、この活動に参加する子どもたちの真の言語力を評価することを目的に、脳科学・言語獲得・学習能力（思考力）・心理発達（人格形成）の 4 分野から「手話言語を獲得・習得する子どもの力」にアプローチする研究プロジェクト（日本財団助成事業）が企画され、その心理発達分野の調査の一つとして、「津守・稲毛式精神発達診断」を用いることとなった。

津守・稲毛・磯部（1961,1965）は、0～7 歳の乳幼児の精神発達を診断する質問紙検査として、5 つの領域からなる精神発達診断を開発した。年齢に応じて 3 つの質問紙があり（0～12 ヶ月用・1～3 才用・3～7 才用）、保護者から報告される子どもの日常生活状況をもとに乳幼児の精神発達を測定する。ただし、質問項目の中には、音への反応や日本語（音声言語）でのやりとりを問う項目が複数含まれているため、日本手話で育つ聴覚障害児の精神発達を評価するには、質問文の検討を試みる必要があった。

本発表では、「津守・稲毛式精神発達診断」を用いて聴覚障害児の精神発達を測定するために、質問の内容や表現を変更した項目を報告し、41 名の対象者に実施した感触と今後の展望について述べる。

（実施に関する提案）

「津守・稲毛式精神発達診断」は、「運動」・「探索・操作」・「社会」・「生活習慣」・「理解・言語」の 5 つの領域から構成される。その下位項目である全 438 の内 50 の質問項目を、手話を獲得しつつある聴覚障害児への検査実施に適用するよう、ネイティブサイナー（日本手話を母語とするろう者）と、日本語話者であり心理学を専門とする研究者らが議論し、それぞれの項目を検討した。以下に変更が必要となった点について、いくつか例を挙げて述べる。

「運動」の全 97 項目については、変更を要しなかった。

「探索・操作」では全 101 項目の内、9 項目（4,7,50,67,77,84,97,100,101）を変更した。「4.音のした方に、首をまわす」の項目は「ドンと振動した方や、電気の明滅した方に首をまわす」とし、きこえない・きこえにくい赤ちゃんが反応を示しやすい振動や視覚的な刺激への反応を問う内容にした。また、「67.自分でかってな歌を考えて、うたう」に関しては、「自分でかってな歌や手話ばんばんを考えて、うたったり表現したりする」と変更した。ここでいう「手話ばんばん」は、ネイティブサイナーが日本手話から作り出す作品のことで、「こめっこ」活動に多く含まれている。その表現に含まれる固有のリズム、間合いや流れ、動きの抑揚や強勢はま

さに手話のプロソディーであり、手話ばんばんを繰り返して楽しむことによって、子どもたちは自然に手話を吸収している。

「社会」では、全 90 項目の内、6 項目（7,16,26,33,41,47）を変更した。「4.声をたてて笑う」の項目は、「表情いっぱい、ときには声を出して笑う」に、「41.遊び友だちの名まえがいえるようになる」は、「遊び友だちの名まえがいえるようになる（手話であらわせる）」とした。

「食事」では、全 77 項目の内、6 項目（5,15,23,27,29,43）を変更した。「29.おいしい物を食べると、「オイシイ」という」を「おいしい物を食べると、「オイシイ」という（手話表現を含む）」というように、子どもたちが手話で伝えてくれる内容も評価できるように変更を行った。

「理解・言語」では、全 73 項目の内、29 項目（1,5,9,10,13,14,16,17,18,19,21,22,25,26,27,28,30,33,37,38,41,43,46,48,52,53,56,69,71）を変更した。「1.話をするように声を出す」を「話をするように手を動かしたり、声を出したりする」、「18.自分の名まえを呼ばれると、「ハイ」と返事をする」を「自分の名まえを呼ばれると、「ハイ」と返事をする（手をあげる）」とし、音声による反応だけでなく、手や身体の動きでの表出も評価できるように工夫した。また、「46.他の子の遊びに加わるとき、「いれて」という」は「他の子の遊びに加わるとき、「いれて」と伝える」に、「69.自分の発音を、自分で気づいてなおす」は「自分の手話表現や指文字の手指の形を、自分で気づいてなおす」に変更し、音声言語に限定せず、きこえない・きこえにくい子どもたちの実態に即した形にした。

（今後の展望）

上記の手続きによって変更した質問紙を用い、2020 年度に 41 名の対象者にのべ 64 回の検査を実施したところ、いずれの保護者からも問題なく回答を得ることができた。

今後、「手話言語を獲得・習得する子どもたちの力」にアプローチする研究プロジェクトにおける心理発達（人格形成）の分野では、発達早期に家族と共に手話に出会い、ネイティブサイナーとのやりとりや遊びをとおして手話言語を自然獲得する子どもたちが、手話を習得しながら子育てを始める親のもとで成長するプロセスを、愛着形成・認知・コミュニケーション・対人関係・自己認識等、複数の発達ラインから捉える縦断的研究を行っていく予定である。乳幼児の精神発達検査については、0～3 才児には半年に一度、3～7 才児には 1 年に一度の頻度で実施し、データの収集と分析を進めていきたい。

（文献）

津守真・稲毛教子・磯部景子（1961,1965）乳幼児精神発達診断法 0 才～3 才まで、3 才～7 才まで 大日本図書
河崎・物井・久保沢（2018）「手話言語のあふれる早期支援(1)(2)」日本特殊教育学会 56 回大会ポスター発表
(MONOI Akiko, NAKAO Emiko, KAWASAKI Yoshiko)